

科目担当者氏名		科目担当者連絡先(メールアドレス)
溝部明男・竹内慶至		mizobe@staff.kanazawa-u.ac.jp
連絡責任者氏名		科目設置機関名
小林 大祐		金沢大学 文学部 人間学科 史学科 / 人間社会学域 人文学類 人間科学コース・フィールド文化学コース
授業科目名	科目認定番号	受講者数
社会学調査実習(社会調査実習)	KNZa-110301-1	13人

## I. 調査実習に関するコメント

学生が果たした役割や実習全般に対する感想など：

先行研究の検討、調査項目の作成、調査票の作成、サンプリング、調査票の発送と回収、データクリーニング、データエディティング、データ分析、調査報告会の実施、報告書の作成まで、調査に関する全てのプロセスに学生が参加した。自主的なグループミーティングやリーダー会議の実施、受講者間による積極的なサポートを行うなど、意欲的な参加態度が度々見られ、非常に好感が持てた。ただし、サークルやクラブ活動、就職活動、アルバイトなど他の活動も非常に活発に行っている学生が多かったため、調査実習とのバランスをとるのは難しかったのではないかと思う。本調査実習では、実習参加者は調査プロセスの全てに関与したため、各自の長所や短所などを各自(再)認識する機会にもなり、将来のことや進路、職業選択などについて考える良いチャンスともなったと思われる。

## II. 調査の企画・設計(デザイン)

1. 調査のテーマ/領域：

発達障害と共生社会に関する意識調査/領域:医療、障害者福祉、発達障害、差別、福祉国家、科学技術等

2. 調査の内容/概要：

金沢市民を調査対象とし、発達障害に関する意識を中心に、障害一般に関する意識、障害と教育に関する意識、差別意識、科学技術に関する意識、福祉社会・福祉国家に対する意識、社会的属性等を盛り込んだ質問紙調査を実施した。

3. 調査の範囲/対象(量的調査の場合は母集団と標本数及びサンプリングの方法を、質的調査の場合は対象者選定の理由を必ず記入)：

母集団:2011年7月1日時点において満20歳以上、70歳未満の金沢市民。/標本サイズ:

標本サイズを1000として計画したが、うち宛名不明などで調査票が対象者に届かず返送されてきたものが6票あった。したがって、到達数は994である。/サンプリングの方法:住民基本台帳を抽出台帳として確率比例抽出法で標本抽出を行った。

4. 主な調査項目：

発達障害等の障害や病に関する知識の有無、障害のある人との関わり方、発達障害の治療や診断に関する意識、発達障害のある子どものための教育のあり方に関する意識、障害一般に対する意識、差別一般に関する意識、性別、生年、居住年数、子どもの有無と人数、学歴、結婚の有無、就業形態、職業、生活満足度、年収等。

## III. データ収集の方法と結果

5. データ収集(現地調査)の方法：

郵送調査法(事前予告1回、督促1回)

6. 調査の実施時期・調査地・調査員の数：

調査の実施期間:2011年10月21日(調査票発送日)~11月30日(最終回収日)/調査地:金沢市/郵送調査のため訪問調査員はいない。

7. 収集したデータの量と質への評価(量的調査の場合は有効回収票及び回収率を必ず記入)：

有効回収数は581票、有効回収率は58.5%であった。この種の調査の回収率としては比較的良好であり、データの質・量ともに妥当なデータであると考えられる。

## IV. データ分析の方法と結果

8. データ分析/解釈の方法：

SPSSを用いた計量分析を行った。クロス表分析、相関分析、重回帰分析、二項ロジスティック分析などを行った。

9. 調査の成果(調査から得られた主な知見など)：

「自閉症」という言葉はかなり知られていたが、「アスペルガー症候群」や「高機能自閉症」、「自閉症スペクトラム障害」などのタームは「まったく知らない」という割合が非常に大きかった。発達障害の「早期発見」に対して非常に肯定的な傾向が見いだされた。また、病いや障害のことは「専門家にまかせたほうがよい」という意見に対する肯定的な傾向も見いだされ、権威主義的態度および性別との関連もみられた。さらに、発達障害の薬による治療に対する危険性については性別、教育年数との関連がみられた。

10. 報告書刊行の予定と概要：

調査対象者に対しては、実習受講者によるレポートおよび調査対象者から寄せられた質問に対するQ&Aによって構成される「お礼報告書」(14頁)を2012年2月に送付した。実習受講者による詳細な分析結果および調査実習に関する各種資料を掲載した最終的な実習報告書は2013年3月に刊行を予定している。